

沼田市文化財調査報告書第2集

「大釜漏1号古墳」
発掘調査報告書

群馬県沼田市教育委員会

1982年

沼田市文化財調査報告書第2集

「大釜漏1号古墳」
発掘調査報告書

群馬県沼田市教育委員会

1982年

序

ここ数年、沼田市においても関越自動車道建設工事をはじめとする開発事業が盛んになり、その開発予定地内にある文化財、特に埋蔵文化財の取り扱いについて大きな問題が生じてきている。

今回発掘調査した古墳も、市農政課が主体となって行っていた、薄根北部地区のほ場整備事業に伴う道路改良工事の敷地内において偶然発見された未登録の古墳であった。関係各課と協議の上、工事の公共性を考え、記録保存の処置をとらざるをえなかった訳である。

この古墳は、発掘調査後破壊されてしまったが、利根・沼田地方の古代を明らかにする上で多くの貴重な資料を残してくれた。この報告書は、これらの資料を集成したものであり、これが利根・沼田地方の古代史の解明に役立てられると共に、文化財保護の关心と理解を深める資となれば幸いと考える。

最後に、今回の調査にあたり、御指導・御助言の労をたまわった群馬県教育委員会文化財保護課をはじめ、御協力いただいた方々に深く感謝の意を表す次第です。

昭和58年3月31日

群馬県沼田市教育委員会

教育長 木 村 一 郎

例　　言

1. 本報告書は、団体は場整備事業(薄根北部地区)地区外道路改良工事中に発見された古墳の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、沼田市農政課が主体者となり、沼田市教育委員会が、昭和57年12月13日より同年12月25日までの13日間実施した。
3. 発掘調査した古墳は、沼田市大釜町八幡平 271番地に所在し、「上毛古墳綜覧」「群馬県遺跡地図」等に記載がないため、「大釜漏1号古墳」と仮称した。
4. 本報告書の作成にあたり、遺構・遺物の実測図の整理は石北直樹が行ない、他は水田 稔が担当した。ただし、発掘前の測量原図は、農政課の作成である。執筆については、各章文末に記した通りである。
5. 本発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御協力をいたしました。
(敬称略)

〈土地所有者関係〉 太田直次郎

〈は場整備関係〉 沼田市農政課長田村栄吉、同課農政係長新井美幸、同係主事原明弘、黒岩勉、倉品敦、同主事補角田幸保、木樽忠一、水越建設

〈研究者関係〉 群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県立歴史博物館学芸第一課長外山和夫

目 次

序	沼田市教育長 木 村 一 郎
例 言	
I 発掘に至る経過	1
II 立地・環境と周辺の遺跡	2
1. 立地・環境	2
2. 周辺の遺跡	2
III 遺構と遺物	3
1. 外部構造	3
2. 内部構造	4
3. 出土遺物	8
IV 考 察	9

善上・三峰神社裏遺跡

三峰山

後田遺跡

金山古墳群



師B遺跡



原町経塚

大釜遺跡

大釜漏

1号古墳



諏訪平遺跡



四釜川

上越線

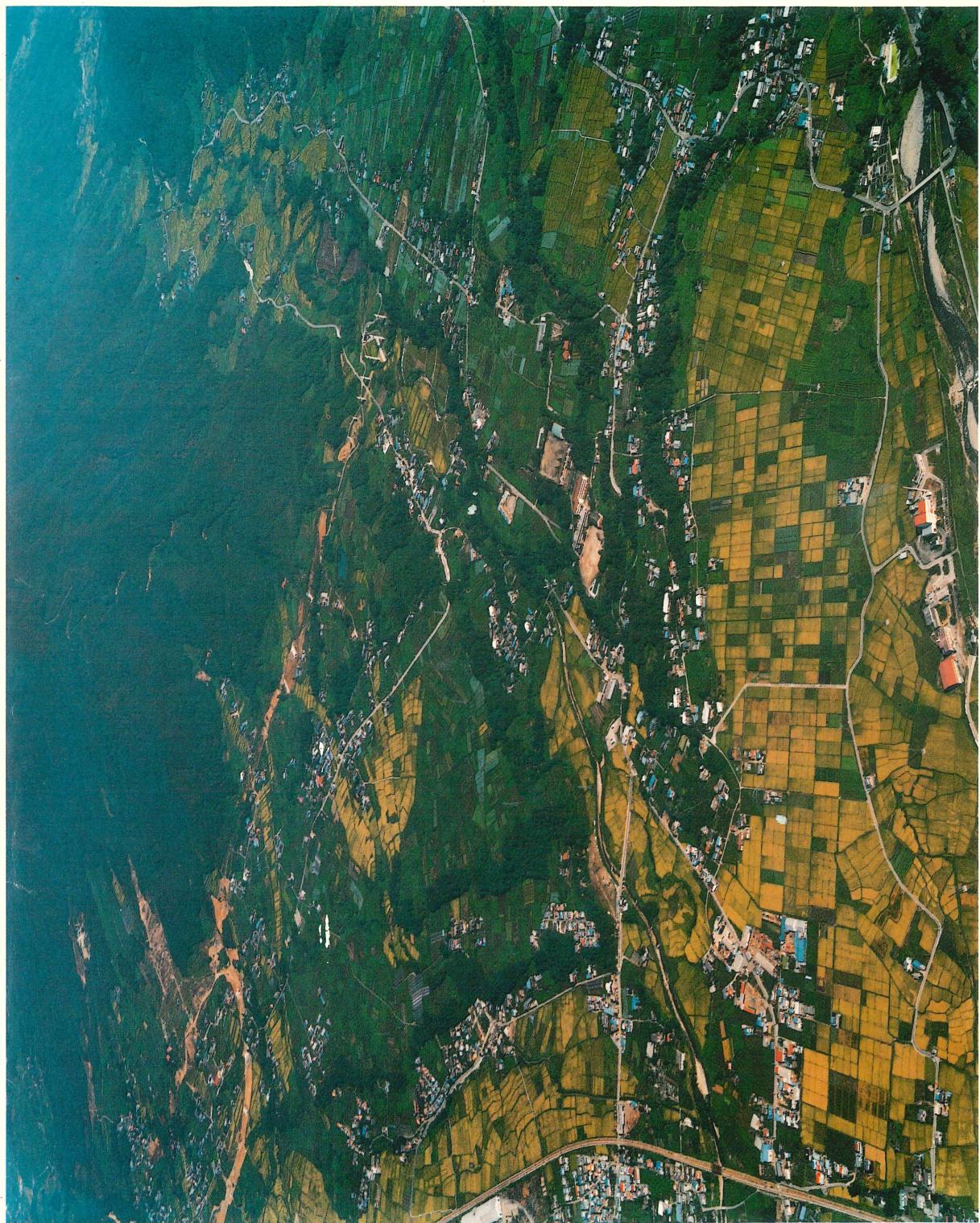
石墨遺跡



大釜漏 1号古墳周辺の地形と主な遺跡（沼田公園上空より）

薄根川





I 発掘調査に至る経過

昭和57年9月、沼田市農政課より同課が担当している、沼田市大釜町内のは場整備事業に伴う道路改良工事の敷地内において、古墳らしいものが発見されたと市教育委員会に連絡があった。ただちに係員が現地踏査した結果、大小の礫が寄せ集められ、築におおわれてはいたが、玄室の奥壁及び左右の側壁の一部と、奥壁にかかる天井石一枚が露出しており、また檻円に変形されてはいるがわずかにマウンドも認められ、明らかに横穴式石室を持つ古墳であることが確認できた。この古墳は「上毛古墳綜覧」「群馬県遺跡地図」などの遺跡台帳に記載もれの古墳であることが判明した。

これらの状況を農政課に報告するとともに、道路改良工事計画の詳細及び今後の対策等を協議した結果、①古墳の玄室の奥半分が道路敷地内にかかり、すでに買収済。羨道部を含む他の部分は私有地であること。②すでに古墳の位置する所まで道路巾の拡張がなされており、古墳を避けて道路を通すことは不可能であること。③この道路の改良ができないと、重機が通れず、は場整備そのものがストップしてしまい、地域住民への影響が大であること。④教育委員会も12月まで関越自動車道に伴う「石墨遺跡」の発掘調査を続けており、ただちに対応ができない。などから、①発掘調査は石墨遺跡の本年度分の調査が終了する12月中旬から開始する。それまでの間、古墳部分の道路巾は、重機の通れる最小の巾とし、古墳周辺の地形変形は最少限にとどめは場整備事業を行なうこと。②古墳の発掘調査なので、道路敷地内ののみの発掘では意味がなく、私有地部分も発掘調査の対象とすることなどが確認され教育委員会・農政課協力の上に発掘調査の準備がなされた。

昭和57年12月13日から12月25日まで下記の組織で発掘調査が実施された。

〈古墳発掘調査組織〉

沼田市教育長	木 村 一 郎
社会教育課長	松 永 純 雄
〃 係長	新 井 康 裕
指導主事	水 田 稔 (担当)
文化財保護主事	石 北 直 樹 (担当)
事務嘱託員	生 方 幸 男
	高 橋 玲 子

発掘参加者	大 島 は る	・	大 竹 と み	・	河 合 博 子
	川 端 操	・	桜 井 文 子	・	高 山 よ し
	中 村 ヒサエ	・	林 い ち	・	平 形 春 江
	笛 木 栄 子	・	保 坂 照 子	・	牧 野 ヒデ子

(水田)

II 立地・環境と周辺の遺跡

1. 立地・環境

沼田市は、群馬県北部の、北を谷川岳を含む三国山脈、東を武尊山系、南を赤城山、西を子持山に囲まれた沼田盆地のほぼ中央に位置する。この沼田盆地より利根川に沿うか、赤城山の裾野を越して南下すれば、県中央の平野部に、また北上し三国山脈を、「三国越え」「清水越え」すれば、新潟県へ、東にすすめば、栃木県へ、また「尾瀬越え」すれば福島県へ、西へすすめば、吾妻郡へとぬけることができる位置にある。現在の市街地は、西を南流する利根川に、北・南をそれぞれ西流し、利根川に合流する薄根川・片品川によって浸食された沼田台地上に開ける。

上記の3河川は、その流域にみごとな河岸段丘を形成するが、沼田台地の対岸に顕著にみられ、台地側は急峻な崖となっている。台地の北を流れる薄根川も四段の河岸段丘を形成しており、特に右岸の沼田市岡谷町から下流の善桂寺町にかけて顕著に認められる。この薄根川の段丘の西端は、南西に流れる四釜川左岸の段丘に続く。四釜川右岸の段丘は、三峰山南・西麓に広がる利根川の形成した河岸段丘に続く。

四釜川は、沼田市佐山町を貫流し、三峰山・戸神山の間を流れ出る石墨町付近より下流に、小規模ながら、薄根川・利根川の段丘に対応する四段の段丘を形成し、薄根川が利根川と合流する付近で、やはり利根川に合流する。

本古墳は、この四釜川右岸の二段目の段丘上に位置する。標高 389m～390m、現河床との比高差は約5mである。この古墳の位置する付近は、三峰山系の南東にのびる尾根が、四釜川近くまで張り出し、段丘面を非常に狭いものにしている。特に二段目は、三段目との段丘崖からの土石が河床に向って流れ出した傾斜した地形を作っており、本来の平坦地はみられない。本古墳は、このような段丘の西端、すなわち三段目との段丘崖に接するようにして築造された、いわゆる「山寄せ」の古墳である。

2. 周辺の遺跡

沼田盆地を中心とした利根・沼田地方（利根郡と沼田市→その歴史を語る時、その地形・文化等から切り離して考えることはできない）にも多くの遺跡の存在が、古くから知られている。（註1）しかし、永い間、本格的な発掘調査がほとんど行なわれなかった（註2）ため、その内容等について不明な部分の多い地域であった。しかし、昭和48年度以降「上越新幹線」の建設工事や、それに付随する各種工事に伴う発掘調査が、県文化財保護課・県埋蔵文化財調査事業団を中心に、月夜野町で実施され（註3）、さらに昭和55年度以降「関越自動車道」の建設工事に伴う発掘調査が、沼田市昭和村・月夜野町・水上町において実施され（註4）、その敷地内に限られてはいるが、遺跡の内容が明らかになりつつある。

これらの成果をふまえ、本古墳周辺の遺跡を、古墳時代を中心にみていくことにする。旧石器時代から弥生時代、奈良時代以降の遺跡は、「地図1」に示した通りである。

第一図 付近の遺跡



「上毛古墳綜覧」によると、利根・沼田地方の古墳数は、445基と記載されている。この古墳のほとんどは、利根川及びその支流の段丘上や、わずかに開けた平坦地である下記の地域に集中している。これらの古墳は、7C代のものが中心で、小円墳がほとんどである。

- 月夜野町師を中心とする三峰山南・西麓（第1図-No.A,B）
- " 塚原周辺（第1図-No.H）
- 沼田市岡谷町峰山周辺（第1図-No.C）
- " 奈良町・秋塚町周辺（第1図-No.D）
- " 横塚町愛宕神社周辺（第1図-No.G）
- 川場村生品周辺（第1図-No.E）
- " 天神周辺（第1図-No.F）
- 昭和村森下・川額周辺（第1図-No.J,K）
- " 糸井周辺（第1図-No.I）

上記地域以外では、利根川・片品川に沿った低地に点在する。（第1図-No.M,L）

また古墳時代の集落址は、月夜野町後田遺跡（註5.第1図-No.4）、同町十二原遺跡（註6.第1図-No.19）、同町大原遺跡（註7.第1図-No.20）、沼田市石墨遺跡（註8.第1図-No.8）、同市諏訪平遺跡（註9.第1図-No.7）、同市大釜遺跡（註10.第1図-No.2）、川場村高野原遺跡（註11.第1図-No.13）、昭和村糸井宮前遺跡（註12.第1図-No.16）などで、その存在が確認されている。これらの結果などから、利根川・薄根川・片品川の段丘上面、及び沼田台地上の北辺部に古墳時代の集落が分布すると推定される。

(水田)

III 遺構と遺物

1. 外部構造

本古墳は前述のように昭和10年に行われた群馬県下の古墳分布一斉調査では確認されておらず、発見当時は篠と雑木に覆われ、天井石一枚と奥壁と左右両壁の一部が露出するのみであった。周辺は奥壁の北側1.5m程には農道が東西に走り、段丘崖の雑木林になっており、東側から南側にかけては杉林、西側が桑畠という状況であった。その中に石室を中心として楕円形に削り取られてはいたが、墳丘らしき高まりの存在が認められた。

墳丘を覆っている表土を排除すると、多量の川原石や角礫が崩落あるいは投げ寄せられた状態で検出された。その石材からみて壁用石、閉塞石、裏込め石等と思われる。石室前面の崩落石を排除すると地山になり、墳丘の盛り土が認められるのは左右両壁側と奥壁裏で、ほとんどが流失しており、裏込め石や壁用石が露出している状態であった。

盛り土は3層に分層できた。第I層、黒色土層。5cm~15cmの円礫や角礫（裏込め石）を外側から押え込むように根石外縁より50cm~60cmの巾をもって石室を取り巻く。現状で壁の2段目まで残存する。第II層、黒色土層。二ッ岳軽石（FP）を多く混在する。小量ではあるが小礫をも含む。第III層、黒褐色土層。二ッ岳軽石の粗粒子を少量含んでおり、土質は細かい。地山は黄色味を若干

帶びた褐色土層となって
いる。やや砂質ではある
が粘質が強く、本古墳は
この層を平坦に地形し、
石室根石を設置して構築
している。

なお、石室の西側と南
側は桑畠の開墾によって
墳丘が著しく変形してい
るが、石室開口部より南
へ3.5m、東西は石室主
軸より2.8m～3.5mの
楕円状に周囲の平坦面と
画するラインが確認でき
る。しかし北側は農道に
よって段丘崖の自然傾斜
面が削られており、不明
確であった。

周堀等の確認のためトレンチを主軸に沿って、また直交させて4ヶ所に設定したが、段丘の基盤層である砂礫層がすぐ検出されてしまい、周堀は存在しなかったと思われる。よって墳丘裾部も把
握できず、前述の状況とも合わせて、墳丘の規模は明確にできなかった。その他遺構と思われるも
のは検出されなかった。

埴輪は調査中一片の出土も無く、その存在は無かったと推定される。

2. 内 部 構 造

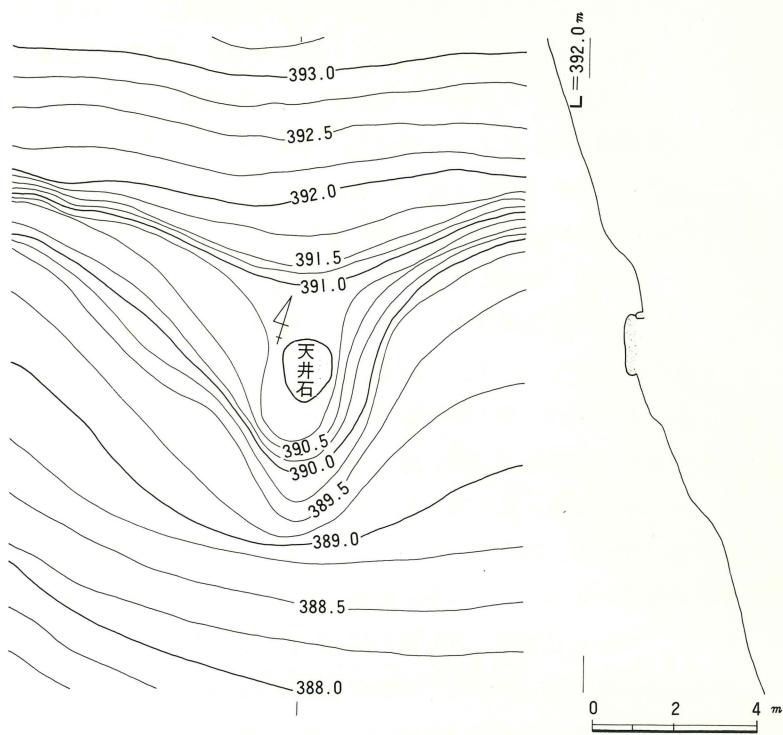
奥壁にかかる天井石一枚を残し、閉塞部付近は崩落が著しいが、根石が開口部まで残存する自然石乱石積の横穴式袖無型石室で、開口方向をS-17°-Eにとっている。

調査に入った時点では、多量の土石のためほとんど石室は埋没しており、天井石が露出している状況であった。

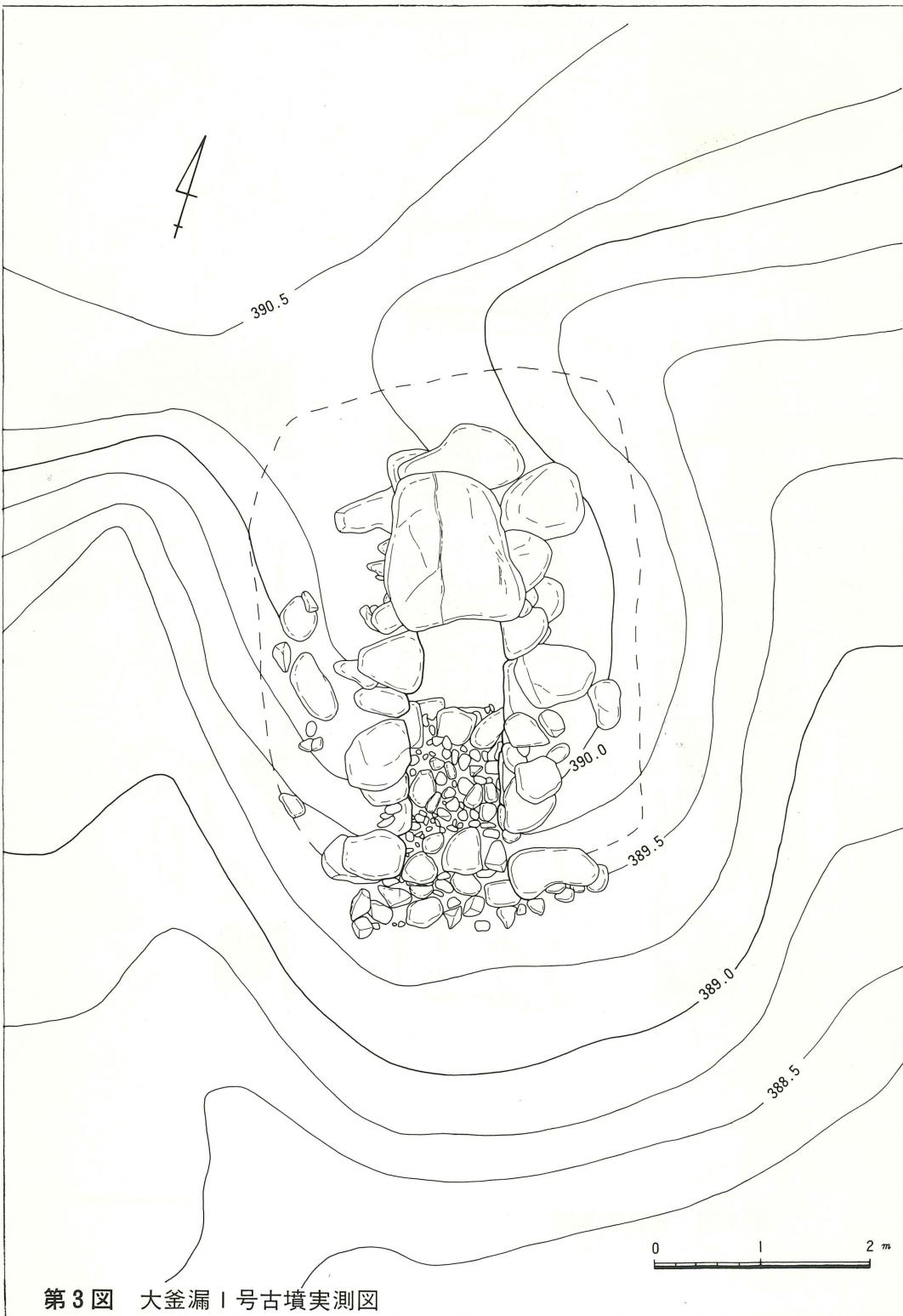
石室の規模は全長3.6m、玄室長は左壁際1.95m、中央部1.95m、右壁際1.80m、奥壁巾1.05m、中央部1.05m。閉塞長さは左壁際1.56m、中央部1.58m、右壁際1.80m、巾0.95m、天井石までの高さは奥壁際で床面から1.05mを計測する。

石材は本古墳後方の三峰山からの転落石である「溶結凝灰岩」を多用しているほか、川原石も使用している。川原石は前方50mを西流する四釜川より搬入されたと推察する。

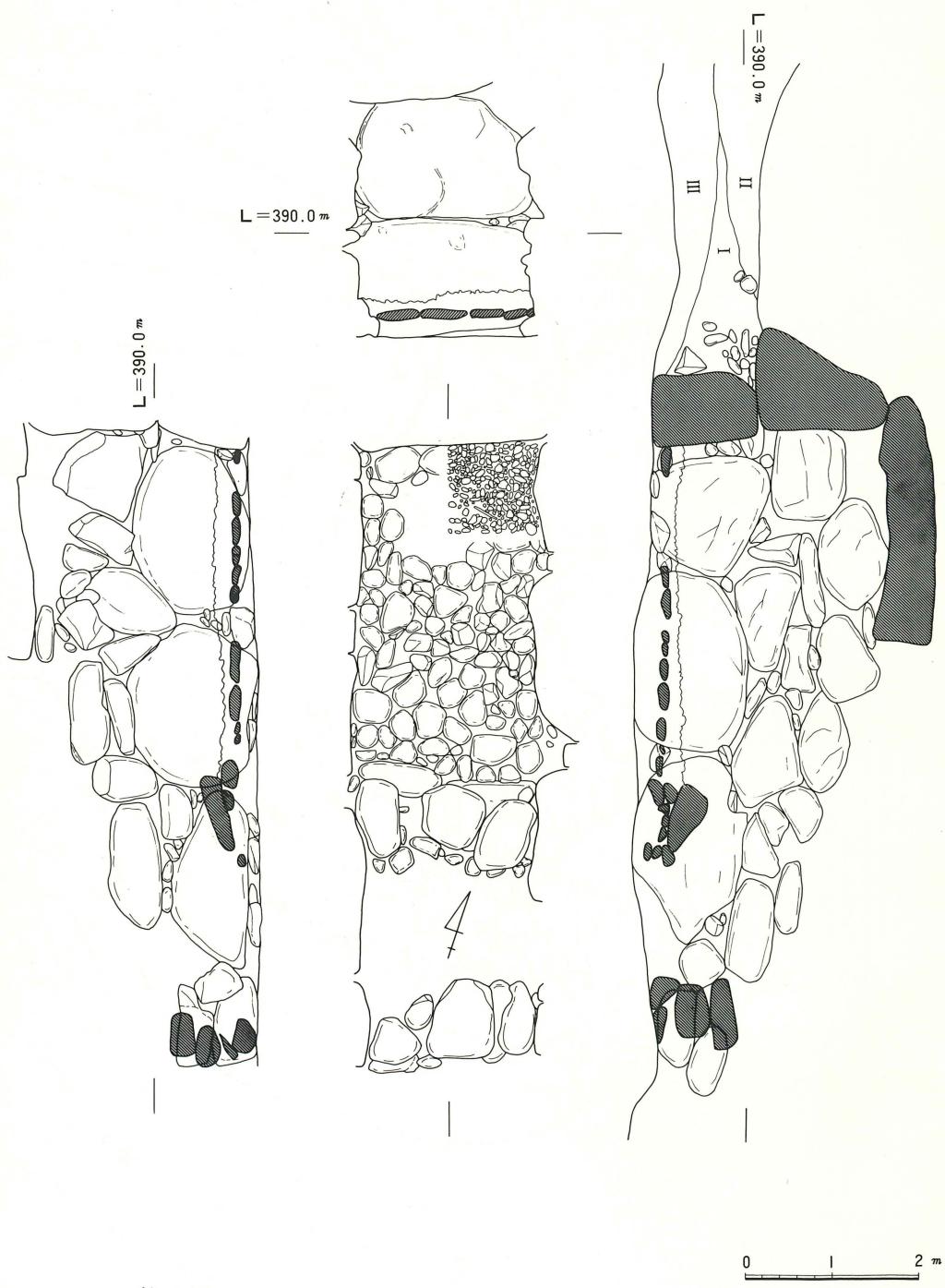
石室根石は7個の大石と入口部に設置するやや小振りの石2個、計9個をもって構成する。石材



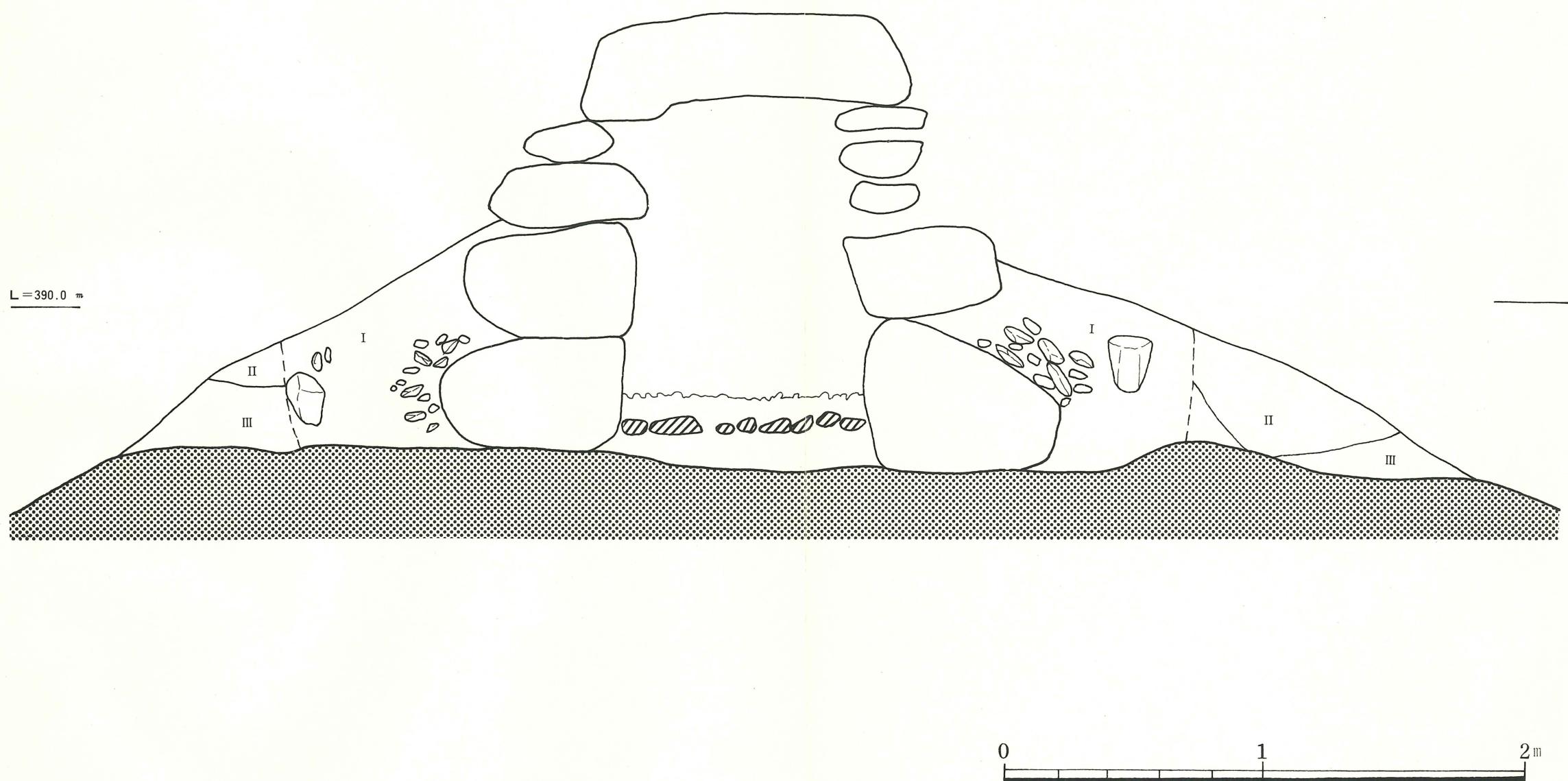
第2図 発掘前測量図



第3図 大釜漏I号古墳実測図



第4図 石室実測図



第5図 墳丘断面図

はすべて前述の「溶結凝灰岩」である。根石は入口部の2石を除いて“坐わり”を意識して前傾を制するため、長さ20cm、厚さ8cm程の角礫を地形面と根石の間隙に詰め込んでいる。左右両壁の入口部と奥壁寄りの1番目および2番目の根石は横位に据えているのに対し、奥壁と3番目は縦位に据え、各々の平面を最大に利用している。

壁の遺存度はあまり良好ではなく、玄室中央部から開口部にかけて崩壊が著しく、奥壁付近も両側壁とも壁用石の上部が引き抜かれており、天井石が辛うじてかかっている状態であった。しかし入口部の根石まで残存していたため、石室の規模等が把握できた。積み方は横積みを基調としているが、根石に大石を使用しているのに対し、2段目は60cm×40cm程の石を主体として、さらには左壁に顕著であるが上部へ行くにつれて石が小振りになる傾向が認められる。壁用石間の間隙は30cm×20cmの角礫を楔状に食い込ませ、あるいは小角礫をもって充填する。全体的には雑な感がするが右壁の方が壁用石の大きさが揃っている。両壁には8度前後の転が認められる。

奥壁は天井石に継ぐ大石を用い、2段構成の平積みである。間隙には小角礫や円礫を充填する。平坦な面を壁面に利用しているが、5度前後外傾する。

天井石は現状で奥壁にかかる一枚が残存していた。長さ1.45m、巾は最大値1.28m、厚さ30cmを計り、本古墳最大の用石である。石室内の土砂を排除する過程において偏平な大石2枚が崩れるように出土したが、石材、大きさ、石室の規模等の比較から天井石ではないかと思われる。よって本古墳の天井石は3枚構成であったと推察される。

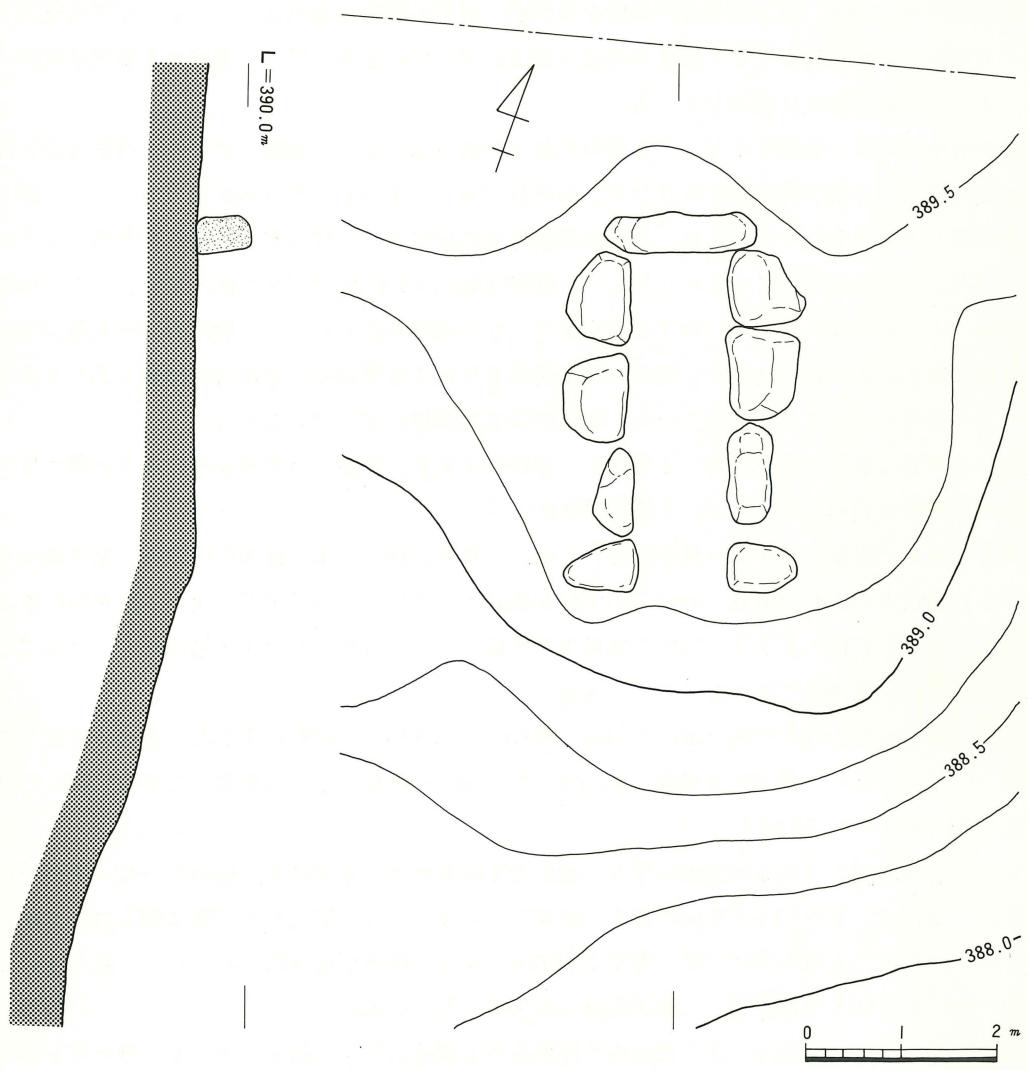
石室内は奥壁から1.95mの地点は長さ50cm、巾17cm、厚さ10cmの河原石を2石、主軸に直交して据え置き、さらにその上部に長さ45cm、巾30cm、厚さ18cmの河原石を3石並列して小口に積んで玄室と閉塞部とを区画している。

玄室は古墳地形面より4cm～15cmの厚さに黒色土を貼り詰め、水平によく固めていた。その上に長さ22cm、巾18cm、厚さ5cm～6cmの偏平な河原石を主体として、間隙なく丁寧に敷き詰めて舗石としている。しかし盗掘を受けた際、奥壁手前50cm×40cmの範囲は抜き取られていた。舗石上には5cm～8cmの厚さに玉砂利が均一に敷き詰められ床面としている。

開口部は長さ20cm、巾25cm、厚さ15cm程の河原石を4個根石として据え、その上に割れ石とやや大振りの溶結凝灰岩、川原石の転石を併用して小口に積み上げ閉塞としている。現状で3段から4段確認できたが非常に丁寧な積み方である。間仕切石との間は玄室の丁寧な作り方に対して、下方には大振りの川原石を投げ込み、さらに15cm×10cm程の小形の河原石、割れ石、溶結凝灰岩の小円礫等を混在させて雑然と詰め込んでいる。

裏込めには多量の円礫や角礫が使用されている。根石の裏側や根石間の間隙にすき間なく詰められており、それらを包み込むように黒色土が盛られている。石室主軸を中心として東西3.5m、南北4.8mの範囲で石室を取り巻いている。

本古墳は前述のように地山である褐色土層を南北5m、奥壁付近での東西6m、石室開口部付近で3.9mの台形状（現状で）に地形し、よく固めて根石を設置している。しかし左右両壁の根石が設置されている部分より、開口部中央の北盤が10cm程低くなっている。これは石室構築時に開口部



第6図 地形面及び根石配置図

の根石の大きさを他石と比較して、若干高い位置に設置するために意図したという解釈よりは、状況からみて石室への入口を考慮した結果と考えられる。なお、ここより20cm南側まで平坦面が続くが、25cm程の段差を生じて一段下がり、約15度の傾斜面が4 m 続き平坦部へ移行する。この面にて墓道その他遺構の検出を追求したが、確認できなかった。

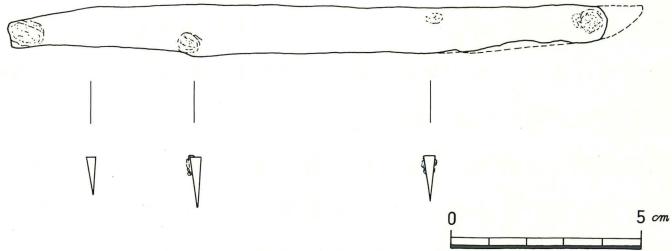
3. 出 土 遺 物

玄室はすでに盗掘を受けていたが、右壁寄り奥壁から40cmの位置に鉾を西方に向け、刃を奥壁方向にして鉄製の刀子1振が出土した。他の遺物は石室内を埋めていた土砂をすべてふるったが検出

されなかった。

刀子（挿図7）

鋒を欠失し、刃部も若干欠落しているが、現状で全長15.9cm 刃部11cm、身巾 1.2cm、棟厚0.3 cm、茎長 4.9cm、茎巾 0.3cmを計り刃闊造りである。目釘孔は無い。全体的に鏽化が進んでいるが、遺存度は比較的良好である。



第7図 遺物実測図

IV 考 察

以上、本古墳における発掘調査を概観してきたが、考察を踏まえてまとめてみたい。

本古墳は前述した通り、三峰山南東麓の四釜川右岸段丘上に位置し、その段丘崖に寄せて構築された山寄せ式の古墳である。墳丘の盛り土はほとんどが流失し、裾部も耕作等により著しく変形していた。調査の結果、葺石や埴輪類、周堀等の存在は無かったと思われ、墳丘規模、形状も不明な点が多い。

内部主体は溶結凝灰岩使用の自然石乱石積の横穴式袖無型石室である。溶結凝灰岩は後方のほぼ南北に伸びる標高1122.5mの三峰山からの転落石で、当地に広く分布している。(註13)現在でも場所によっては露出しており、字名に「石畠」と名称されている地区もあるほどである。よって当時も石材の確保は容易であったと思われ、確保地もさほど遠距離ではなかったと推定される。

石室の規模、その他は前述の通りである。問題点として構築にあたり使用尺度が上げられる。本古墳の石室のように用石が自然石の場合、計測場所の若干の変化によりその数値に変動をきたす。よってその差異を考慮に入れて推定しても困難な状況が多い。本古墳は高麗尺一尺=35cm、唐尺一尺=30cmとして換算して検討すると、各実測値において必ずしも整合しないが、唐尺使用の場合で完尺数値が多く出る。よって唐尺が推定される。

石室は段丘崖の斜面をカットし、前面を平坦に地形したのち根石を地山に直接配置して構築している。所謂「ほり方」は設けていない。調査時において、耕作等により手が加えられている付近は若干の傾斜はあるものの、平坦面となっている。よって地形面とは段差が生じており、外観からは本古墳は基壇上に石室を構築しているように思える。逆に基壇を意識して裾部を削り整形した結果であるのかは調査地の大部分が私有地であり、地主の承諾を得て最少限の範囲で行ったため、またトレンチ調査からの結果を踏まえても不明な点が多く、言及し難い。

石室根石は9個をもって構成する。入口部以外は大石を用いており、壁面には面取りしている様子がうかがえる。さらに設置するうえで大石は各石の端部を接して、左右両壁において選定した石材の大きさ、利用する面で相対するように据えている。設置順序は奥壁を据えたのち、順次前方へ

向かって据えて行ったと思われる。この事実は前述の尺度の問題にも関連するが、入口部の2石はやや小振りな石を使用している。よって両壁の奥から3番目、つまりすぐ後ろの根石との間に隙間が生じているが、この隙間を調整することで使用尺度の完尺数値を定めていると推察される。

出土遺物に関しては、既に盗掘を受けており、刀子が一振り出土したのみであるが、明治の末か大正の初期に本古墳が盗掘され玉類が出土したという事実が地元民より証言されている。

次に本古墳の築造年代について考察する上で、付近に所在する古墳について概観してみたい。

現在、本古墳が位置する段丘上には他に古墳の存在は認められず、利根・沼田地方の同時期の古墳の多くが群集するに比べ、本古墳は単独に存在している。しかし三峰山南麓の沼田市堀廻町から宇楚井町にかけての最上位段丘面には、「上毛古墳綜覧」によると西方450mには「入道塚古墳」（綜覧番号薄根村第9号）、600mには「稻荷塚古墳」（同第8号）をはじめ、宇楚井町内には4基記載されている。西方の利根郡月夜野町字師には金山古墳群を中心に、43基の存在が確認されており、さらに後閑の33基の古墳群へと分布を広めている。これらの古墳の分布は粗密はあるが、三峰山の山裾を囲繞するように分布している。よって本古墳も古墳群のひとつと理解してよいと考える。また東南東3kmには奈良古墳群が分布している。このように数多くの古墳群がみられるが、報告されている資料は僅少であり、調査されず草に埋れている古墳が多数である。

当地域は古墳時代における重要な鍵層である榛名山の一峰二ッ岳より墳出された降下軽石層が存在する。尾崎喜佐雄博士を先鞭に、数多くの研究者によってこの軽石層が形成されたのは6世紀の後半頃と現在位置付けられている。この層の状況により時代認定の手がかりとなるが、本古墳も墳丘を断ち割って調査したところ、二ッ岳軽石が盛り土の中に検出された。よって本古墳は二ッ岳軽石の降下後の構築であり、奈良古墳群の様相（註14）と本県における終末期古墳に見られる特徴を本古墳と比較検討した結果、玄門等の具備その他終末期的特徴は有していない点を踏まえて、本古墳の築造年代は7世紀前半から中葉頃と考えたい。

（石北）

生活場所としての集落址、生産場所としての水田址、さらに墳墓としての古墳群を一括してとらえることは、古墳時代人の生活を復原する上で、またその行動範囲、支配範囲を想定する上で、重要な研究課題である。近年の発掘調査は、大規模な工事に伴うものが多く、その規模も大きくなり、面としての調査が進められるようになってきた。しかし、それでも上記の課題を解決するにはいたっていない。特に隣接する遺跡・遺構の多い平野部においては、一層の困難が伴うであろう。ただし、平坦地の限られた山間部では、その立地・地形等から、それぞれの場所を想定し、関連づける事は、平野部より容易であると考える。

このような考えにたって、三峰山麓をとりまく古墳群と集落址、さらに当然営まれていたであろう水田址、畠址との関連を、今までの発掘調査例、地形及び現在の土地利用等からみていきたい。

① 三峰山麓の地形

三峰山麓の地形を詳しくみると、三峰山東麓は、四釜川によってその裾をあらわれ、前記した小

規模な河岸段丘となっている。南麓は、利根川左岸の河岸段丘が発達している。しかし、この段丘は、沼田市宇楚井町までで、その西隣りの利根郡月夜野町師地区内では、三峰山より南及び南西にのびる尾根の間に、土石流によって形成されたと推定される扇状地形を呈している。この扇状地形も現在では小支谷が入り、地形をやや複雑にしている。特に中央より西にかけて凹凸の多い地形となっている。東側は、やや平坦な丘陵が多く、現在水田に利用されている部分が多い。

② 古墳群の分布

第1図に図示したように、三峰山麓をとりまく古墳群は、河岸段丘部では、標高400m～450mの範囲に分布する。この部分は、段丘最上位面と三峰山麓とが接する傾斜地上にあたる。さらに大釜漏1号古墳のような、段丘崖にそっても分布する。

また師地区の扇状地上での古墳の分布は、やはり標高400m～450mの範囲に、金山古墳群、丸山古墳等があり、その中心であるが、扇状地の東方にある金山の西斜面に扇状地の東端を沿うように山寄せの古墳が標高500mの高さまで分布している。

このように、古墳の分布は、平坦地をさけるように山寄りの傾斜地、山の斜面さらに段丘崖にそって分布するといえよう。

なお、三峰山麓をとりまく古墳群の中心は、その基數、石室の造り・規模等より、師地区であると推定できる。

③ 集落址の分布

②で述べた古墳群が存在する以上、古墳時代人の集落が存在していたはずである。三峰山麓の発掘調査例は、少なく、その調査範囲も限られているが、一応調査された遺跡名、発掘全住居数、古墳時代後期住居数及び全住居数に占める割合等をまとめると次の通りである。

遺 跡 名	発掘住居数	古墳時代後期住居数	割 合	標 高	立 地 等	
沼田市諏訪平遺跡	17軒	5軒	29%	370m	利根川、四釜川の浸蝕をうけて舌状に張り出した段丘上	註-15
" 大釜 "	30	0	0	430～440	段丘最上位面と三峰山麓が接する傾斜地上	註-16
" 石墨 "	49	4	8	420～430	大釜遺跡の東、四釜川をはさんだ対岸の最上位段丘面上(戸神山麓)	註-17
月夜野町後田 "	約300	約240	80	420～430	扇状地東部の裾部に近い丘陵上	註-18
" 師B "	約74	約70	95	370～390	扇状地東部の扇端部の微高地上	註-19
" 善上 "	7	1	14	440	扇状地のほぼ扇央部の小支谷にはさまれた狭い丘陵上	註-20
" 三峰神社裏 "	13	0	0	430	善上とほぼ同じ立地	註-21

上表より、師B・後田・諏訪平の各遺跡での古墳時代後期の住居地検出率が高いのがわかる。これらの遺跡の立地は、比較的標高が低い、利根川・四釜川の沖積地に近い所に位置しているといえる。また検出率の低い場所は、平坦地の近くであるが、標高が高く山麓によっているか、狭い丘陵上に位置する。

④ 推定される水田址

残念ながら三峰山麓において、古墳時代の水田址等の生産址の発見例は、現在の所皆無である。

また、火山噴出物の多い榛名山麓と異なり、発掘調査によって水田址の発見される可能性は少ない。しかし、当時の生産的基盤が、農業である以上、水田の存在は確実である。そして水田を作る場所には、かなりの条件が必要であり、その条件を満たす地形は、ある程度限定されよう。このような考えにたって、三峰山麓の各遺跡に関連すると思われる水田可能地域を、地形・湧水・現在の土地利用等から想定してみたい。

(各遺跡近くの水田推定地域)

- 師B遺跡——扇状地の扇端部の現在水田は南北をはさまれた微高地上に位置する。南の水田は、約20m低く、利根川の沖積地を利用しており、北の水田は、やや標高は高いが、扇端部よりの湧水を利用して開かれている。これらより、この南北の現在の水田地帯は、古墳時代より水田としての利用が可能な地域と考えられる。
- 後田遺跡——師B遺跡の北方約500mの扇状地東側の裾部に近い比較的広い丘陵上に位置する。現在標高600m付近よりの湧水を利用した水田が、支谷にそうように南北に入り、本遺跡付近で広がっている。これらより、この支谷の水田は、面積が狭いことを除けば、古墳時代よりの利用が可能である。また師B遺跡に近く、前記した師B周辺の水田想定地も利用可能地域である。集落の立地からみても、師Bより本遺跡の方が、はるかに広く、適地であったと考えられる。
- 諏訪平遺跡——利根川・四釜川にはさまれ舌状に張り出した段丘上に位置する。20m下には、両河川によって開かれた沖積地が広がる。また同じ段丘面北約500mに莊田沼の存在が知られている。これらより、沖積地及び、同段丘上に水田の存在が想定される。
- 善上遺跡——扇状地のほぼ中心の小支谷にはさまれた狭い丘陵上に位置する。現在の水田は、その小支谷にわずか入りこんでいるにすぎず、より下方の扇端部・沖積地までいかないといふと水田可能地はない。三峰神社裏遺跡も同じである。
- 大釜遺跡——段丘最上位面と三峰山麓の接する傾斜地に位置する。本遺跡からは、古墳時代後期の住居地は検出されなかったが、遺物は出土している。この事より付近に当時の集落が存在する可能性が高い。ここでは、水田想定地より逆に、集落可能地もおってみたい。本遺跡の存在する利根川左岸段丘の最上位面は、巾約500m、長さ約1kmの広大な平坦地となっている。現在ほとんど畠地であるが、原町を通る市道の南に市道部分を底辺とする三角形の形で水田が広がっている。この水田地帯は、現在2ヶ所より水を引いている。1つは、江戸時代初期に開かれたという、石墨町より四釜川の水を引き入れた用水、もう1つは、三峰山麓の龍興寺わきよりの湧水である。用水の方は除くとして、龍興寺わきよりの湧水の利用、また、この水田地帯に「ひどろ田」の小字名のあることから、この地帯は、湿地であった可能性が高く、水田としての適地であったと考えられる。それが、いつ頃からかはわからないが、もし古墳時代後期より水田に利用されていたとすれば、この水田の周辺現在畠地となっている微高地上に、かならず当時の集落址が存在していたはずである。今後の発掘

調査を待ちたいと思う。

⑤まとめ

①～④まで、推定に推定を重ねたような論であるが、三峰山麓の古墳群・集落址・水田推定地について述べてみた。そして当然の結果ではあるが、平坦地に集落、斜面に古墳、低地に水田という傾向が、とらえられそうである。さらにそれらを完全に連結し、関連づけるためには、次の点を解明していかなければならぬ。

○三峰山麓をとりまく古墳の編年——発掘調査された古墳が少なく、また荒廃している古墳が多いため、ひとつひとつの古墳の年代が不明なものが多い。

また、山麓以外の利根川・薄根川の沖積地である沼田市井土上・下沼田地区、月夜野町真庭・政所地区に存在する古墳との年代比較も古墳の築造立地の移り変わりを知る上で重要な問題となろう。

○集落址の完全発掘及び住居址年

代の細分——今まで述べてきた遺跡のほとんどが、関越自動車道の建設工事に伴う発掘調査で、その調査地も限られたものである。
③で示した古墳時代後期の住居地の各遺跡における検出数も、標高が高くなるにつれて少なくなる傾向がみられるが、これらを確実なものにするためにも遺跡の完全発掘が必要である。さらに、古墳時代の集落も新しくなるにつれ広がりをもつはずであり、その広がりを知る上からも住居址年代の細分が必要である。

○水田推定地の発掘調査

——当地方において、水田址の発見される可能性は少いかもしれない。しかし今まで現代の水田地帯は、発掘調査地からはずされることが多かった。今後は、水田地帯への発掘調査も考えるべきである。

大釜漏1号古墳から大部かけはなれた考察となってしまったが、本古墳が三峰山麓をとりまく古墳の1つであることは疑いないことであり、この古墳を築造した人達の集落も必らず近くに存在していたはずである。しかし、本古墳に近い大釜遺跡から古墳時代後期の住居址は発見されなかった。この単純な疑問が、集落との関連を追求させる原因となった。しかし、今まで発掘調査された遺跡も少なく、また発掘調査された遺跡についても報告が出されていない現在、推定に推定を重ねる結果となってしまった。現在沼田市教育委員会において石墨遺跡で集落址を発掘調査している。この報告書の中で、さらにこの問題を追求していきたいと思う。

(水田)

註1－明治30年代より、利根・沼田地方の遺跡・遺物に関する記事が、「考古」「東京人類学会誌」「考古学雑誌」などの中央学会誌に報告されている。

大正から昭和にかけては「上毛及上毛人」「毛野」などの郷土研究誌が発行され、地元の研究者による記事が多く報告されている。さらに、郡町村史が発行され、それぞれの町村の遺跡・遺物の報告がなされるようになった。

註2－群馬大学尾崎喜左雄先生を中心としたグループにより、沼田市奈良古墳群、水上町乾田遺跡などの発掘調査が行なわれている。

註3－上越新幹線建設工事に伴い発掘調査された主な遺跡は、次の通りである。全て月夜野町内である。

「十二原遺跡」日本考古学年報26、1973年版、石川正之助、1975年。

「大原遺跡」上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II、群馬県教育委員会、能登健・中里吉伸、1975年。

「洞I～III遺跡」同上IV～VI、同上、佐藤耕志・下城正・細野雅男・須田茂、1978年～1980年。

「藪田遺跡」同上V VI、同上、下城正、1979年～1980年。

「深沢遺跡」同上IV、同上、佐藤耕志、1978年。

「前中原遺跡」同上IV、同上、能登健、1978年。

「前田原遺跡」同上VI、同上、中束耕志、1980年。

「梨の木平遺跡」群馬県教育委員会、能登健、1977年。

註4－関越自動車道建設工事に伴い発掘調査を実施している遺跡は、下記の通りである。

昭和村－中棚遺跡・糸井宮前遺跡。

沼田市－鎌倉遺跡・戸神諏訪遺跡・石墨遺跡・大釜遺跡。

月夜野町－金山古墳群・後田遺跡・三峰神社裏遺跡・善上遺跡・大友館址・門前A遺跡・高平遺跡・大竹遺跡・小竹A・B遺跡・宮地遺跡・渕尻遺跡・和名中遺跡・今泉遺跡・上石倉A～B遺跡・師B遺跡・三後沢遺跡・名胡桃（城平）遺跡。

水上町－小仁田遺跡・北貝戸遺跡。

註5－「後田遺跡」現地見学会資料、県埋蔵文化財調査事業団 1982年。

註6－註3

註7－註3

註8－沼田市教育委員会が調査中。

註9－「諏訪平遺跡」日本考古学年報27、1974年版 秋池武。

註10－「年報－1」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年。

註11－「高野原遺跡」日本考古学年報27、1974年版、清水和夫。

註12－「糸井宮前遺跡」現地見学会資料、県埋蔵文化財調査事業団 1982年。

註13－「群馬のおいたちをたずねて」上、1977年 上毛新聞社。

註14－「横穴式古墳の研究」尾崎喜左雄 昭和40年、「群馬県史」資料編3、群馬県 昭和40年。

註15－註9

註16－註10

註17－註8

註18－註5

註19－註10

註20
} 月夜野町教育委員会指導主事中村富夫氏の御教示による。
註21)

圖 版



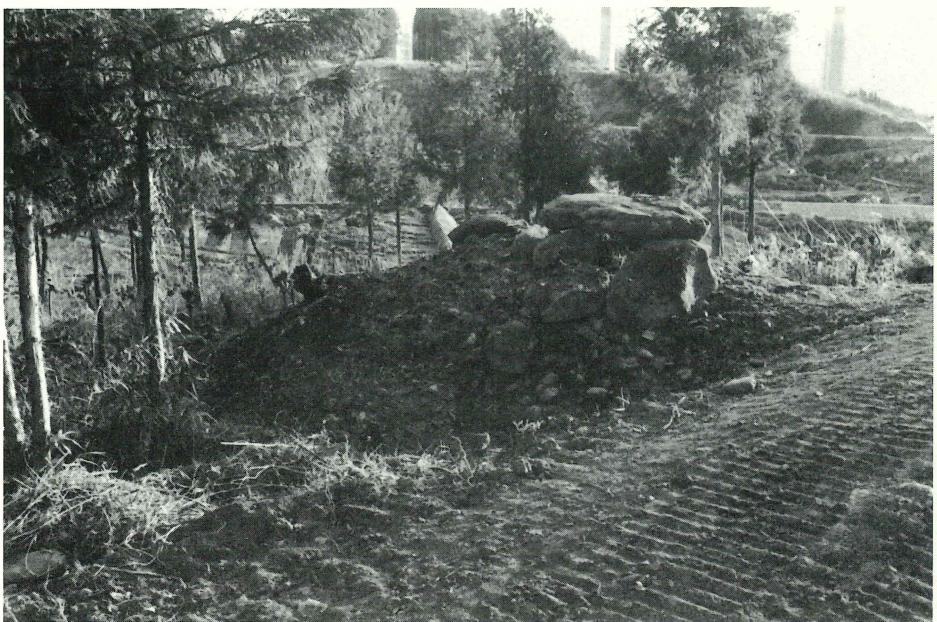
図版1 遺跡遠景（東方の戸神山より）



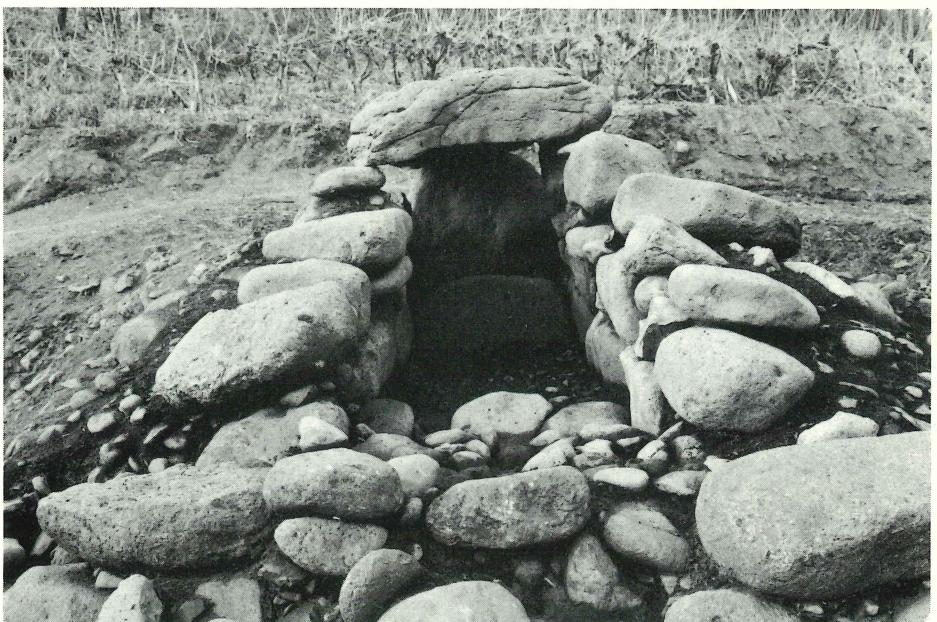
図版2 発掘前の鎮魂祭



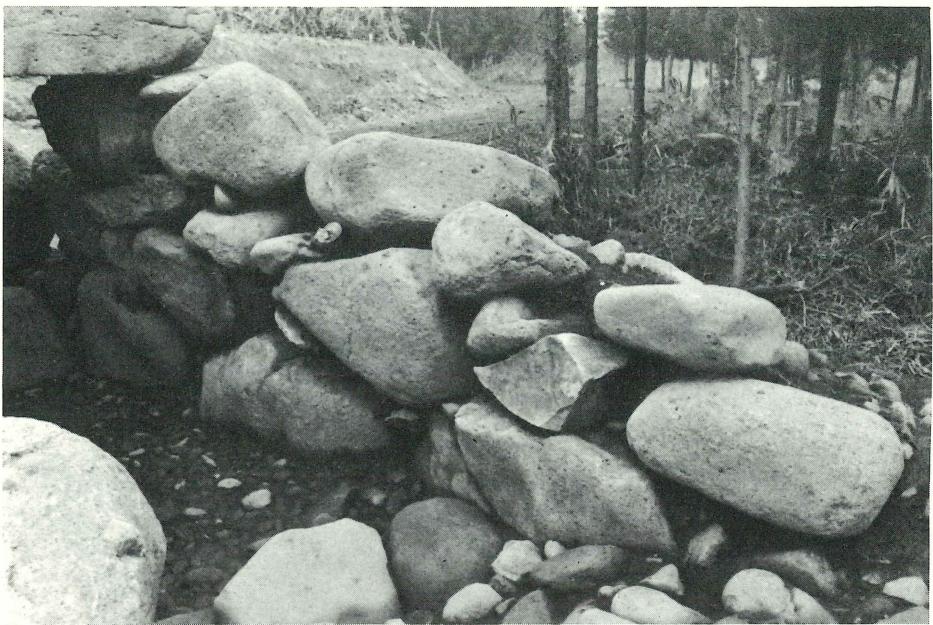
図版3 発掘風景



図版4 調査前の古墳（北より）



図版5 石室全景



図版 6 石室右壁



図版 7 石室左壁



図版 8 石室奥壁



図版 9 石室床面（玉砂利）



図版10 玄室より開口部を見る



図版11 閉塞部全景



図版12 遺物(刀子)出土
状態



図版13 玉砂利と礫石の状況

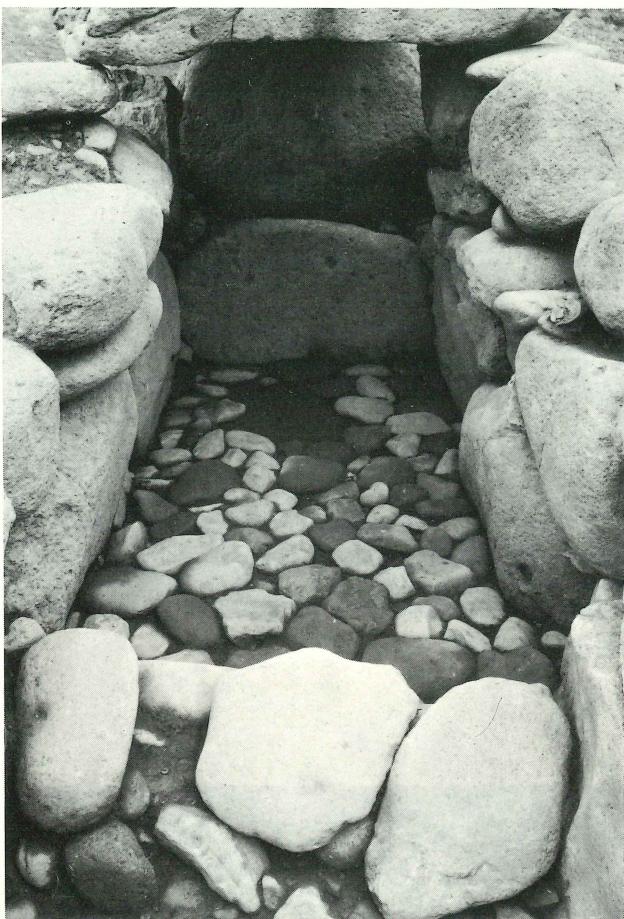


図版14 玉砂利除去後石室全景



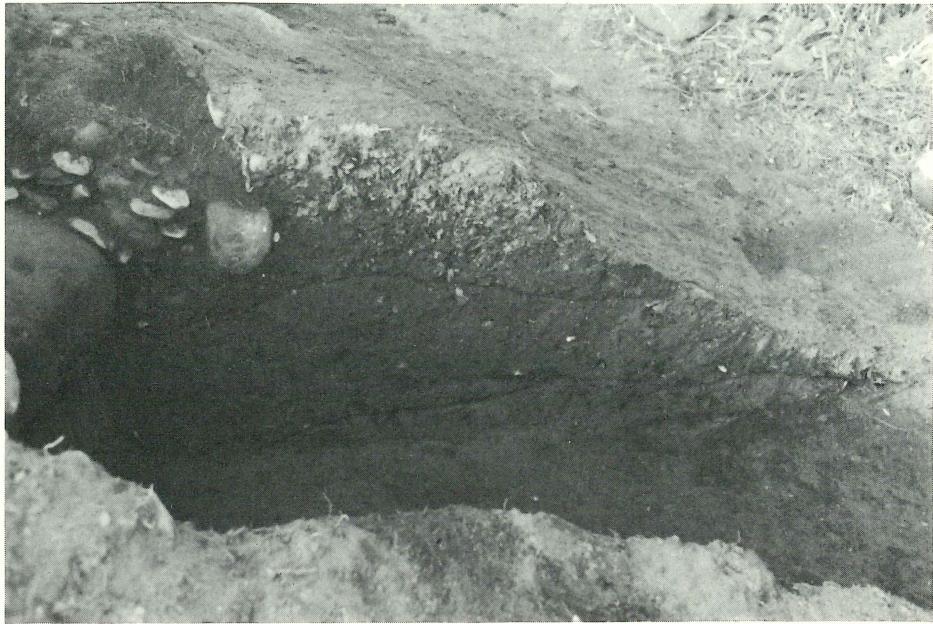
図版15 同遠景

図版16 硃石配置状況

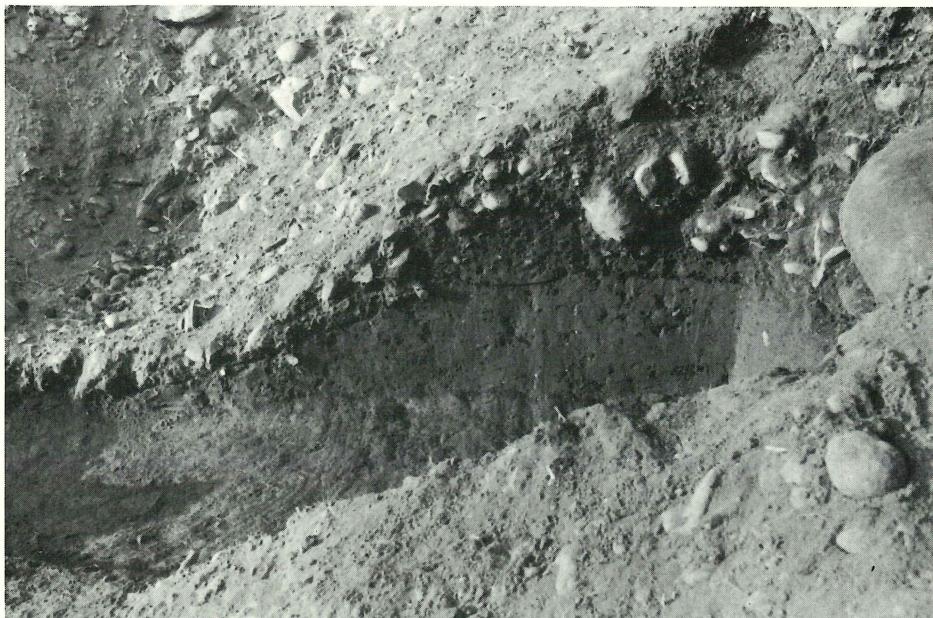


図版17 奥壁北側の封土
状態

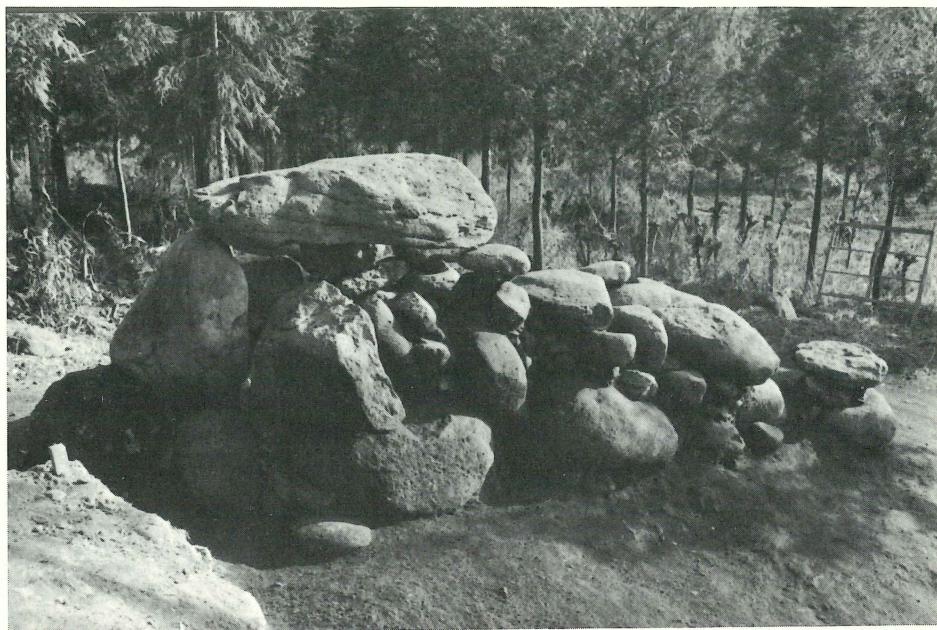




図版18 右壁側封土状態



図版19 左壁側封土状態



図版20 封土除去後石室状態（東より）



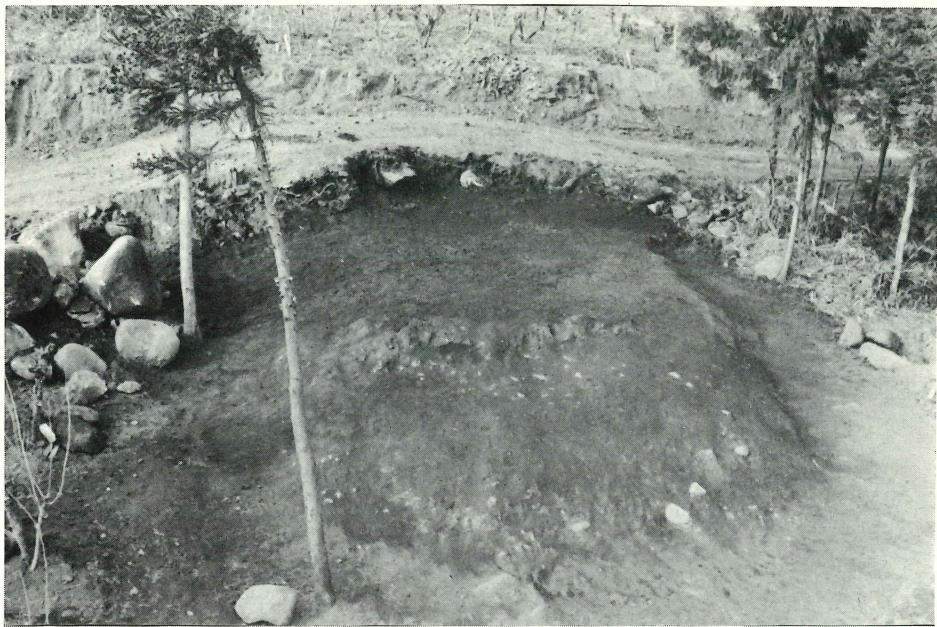
図版21 根石の配置状態



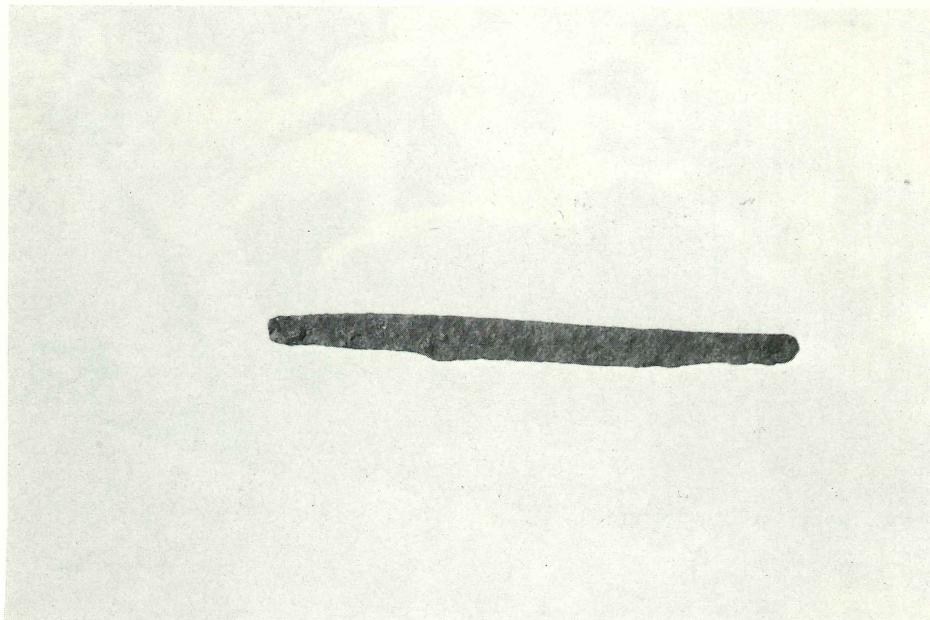
図版22 根石の配置状態（左壁部）



図版23 同（奥壁後方より）



図版24 根石撤去後全景



図版25 遺物（刀子）



発掘調査参加者

沼田市文化財調査報告書第2集

大釜漏1号古墳

発掘調査報告書

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行者 沼田市教育委員会

印刷 沼田市中町1144
有限会社 利根印刷所

